

トップスターのノーマルな恋人

プロローグ

「うちのゼミの女子、けっこう可愛い子、揃ってないか？」

「ああ、確かに」

聞かされたときめいてしまう、彼の優しい声――

大学に入ってから、私がひたすら想いを寄せている先輩。彼は今、友人と話しているようだ。

ここはゼミ合宿でやってきた、軽井沢にある大学の宿泊施設。街の中心部から少し離れているため周囲には緑が多く、とても静かな場所だ。

先輩たちは先ほど、ゼミの教授から資料の準備を頼まれていた。

そこで、なにか手伝うことはないかとやってきたのだけ――

「……そういえば二年の木下亮子きのしたりょうこって、極端に胸、小さくね？」

え……

突然聞かえてきた自分の話題に、ドアを開けようとしていた手を思わず止める。先輩の友人の失礼な言葉に愕然がくぜんとしたが、それでも大好きな彼がどう反応するかが気になった。

——しかし。

「小さいっていうかき、あれじゃあ、前と後ろもわかんねえだろ」
そんな……

「やっぱり、おまえもそう思う？」

「当然」

地獄へ突き落とされた瞬間だった。顔から血の気がさーっと引いていくのがわかる。そのあとも、先輩たちは楽しそうに話を続けた。

「付き合うなら、巨乳な子がいいよな」

「わかるわかる」

東京からここまで来るバスの中では、あれほど親切に話しかけてくれたのに。もし今告白したら、付き合ってもらえるかもしれないと、バカな夢まで見てしまったのに。

ひどいよ、先輩……

やがて、ぐわんぐわんという奇妙な耳鳴りが頭の中で響き始めた。それは合宿所の周りでうるさく鳴くセミの声と重なり、どんどん大きくなる。

気が付くと私は口を手をあてて、外に飛び出していた。あまりにショックで、うまく頭が働かない。とても惨めな気分になり、私はただ泣き崩れるしかなかった。

1

ジジジーツ！

目覚まし時計のけたたましい音で、私、木下亮子は目を覚ました。顔は涙で濡れている。いつもと同じ時刻、午前六時四十五分。また例の夢を見て、私は大泣きしてしまつたらしい。

ときどき夢に見る、大学時代の悲しい失恋の思い出。大好きだった先輩に胸の大きさをネタにされたことは、少なからず私の心に傷を残した。

バストが小さいことがコンプレックスになり、私は今でも男性と付き合うことができなかった。

決して男嫌いだとか、独身主義を貫こうとしているとか、そういうことではない。もちろん高い理想を掲げているわけでも。ただ男性と付き合うことが怖いのだ。

彼氏ができれば、いずれキスをしてセックスすることになる。そうすると、この貧弱な胸を見せなくてはならない。

未来の彼氏も、先輩と同じように私の胸に幻滅するかもしれない。こちらがどれだけ好きになっても、最後にはきつと振られてしまうはず。

自分が小心者であることはわかっていて。それでも私は傷付くのが怖くて、恋愛に踏み出す勇氣

が持てなかった。

彼氏いない歴二十七年で、キスさえしたことがない。

そんな私は、残念なプロポーションをカバーするため、毎日パッド入りのブラジャーを付けている。小さな胸元を少しでも膨らませれば、なんとなく自信を持てるような気がするから――

私は涙をぬぐい、ベッドから起き上がった。

グリーンマンションと名付けられたアパートで、私はひとり暮らしをしている。二つある部屋はどちらも六畳の和室で、小さなキッチンと小綺麗なバス・トイレ付き。

家賃は管理費込みで月八万円。都心から少し離れているが、最寄り駅からは近い。商店街がすぐ側にあるのも便利だ。

「やて、と」

さつき見た夢を頭から追い出し、私は出勤準備を始める。

顔を洗って簡単にお化粧をし、真つ黒な髪をポニーテールにまとめ上げる。コンロに小さなやかんをかけてお湯を沸かし、オーブントースターに食パンを一枚入れた。

トーストには、バターとブルーベリージャムを塗るのが好きだ。アールグレイのティーバッグをマグカップに入れてお湯を注ぎ、手早く朝食をすませる。

白いシャツブラウスにダークな色のスーツが、私の出勤スタイル。

就活中の学生のような格好だけど、仕事には最適だし、あらかじめ決めておけば朝の洋服選びで

時間を費やさずにすむ。もちろん、パッド入りブラで、胸のサイズをAからBへとアップさせることも忘れない。

準備を終えた私は、図書館で借りてきた本を一冊バッグの中に押し込み、履きなれた低めのパンツのかかとを鳴らして、いつもと同じ時刻に家を出た。

大学時代、真面目に取り組んだ就職活動。

マスコミ関係への就職を希望し、大手新聞社や出版社、その他メディア関連企業に、片っ端から履歴書やエントリーシートを送った。

次々と不採用通知が届く中、唯一受かったのはウィークリー経済社という小さな出版社。

そして私は今、『ウーマン・ビジネス』の編集部で働いている。

我が編集部がつくっている『ウーマン・ビジネス』は、働く女性のために作られた経済雑誌。政治や経済などの記事だけでなく、女性を応援するための情報がたくさん詰め込まれている。

おすすめのランチエリアにレストラン、オフィスファッション、癒しのスポーツ紹介から、短時間でできるダイエットや星占いまで、取り上げる内容は幅広い。

そんな雑誌を編集している私の一日は、通勤電車の中吊り広告のチェックから始まる。旬の話題や流行、新商品のキャッチフレーズ、他社の雑誌の見出しなど、勉強になる素材がたくさんあふれているからだ。

それがひと通り終わると、趣味の読書を始めるのだけど——
なぜかこの日に限って、城ノ内翔じょうのちりょうというイケメン俳優の広告が気になった。彼が現在主演している連続テレビドラマ『御曹司様おんぞうしが来た！』の広告である。

ハンサムな顔立ちに、うっとりするほどセクシーな眼差しまなざし。そして魅惑的な唇。彼の魅力に、にわかには胸がときめいてしまう。

普段は忙しくてあまりテレビを観ない私だが、城ノ内翔のことは知っていた。つまり彼の人気と知名度は、かなりのものなのだ。

どんな女性と結婚するのかな、こういう人って……

私はふと、そんな余計なことを考えていた。自分とは、縁もゆかりもない人なのに。

やがて満員電車は、カーブで車両を大きく揺らし、駅に到着した。

ドアが開くと、乗客たちは押し合うようにプラットホームへと降り立っていく。

こうして今日も、私の一日が始まるうとしていた——

「おはようございます」

ウィークリー経済社は、新宿にある十階建て雑居ビルの二フロアを借り切っている。その一角に

あるのが『ウーマン・ビジネス』編集部。女性向けの雑誌ということもあって、編集部には女性スタッフしかいない。

「木下さん、悪い。昨日あがってきた特集ページのデザイン、今すぐ見せてくれる？」

「あつ、はい」

オフィスに入った瞬間、美人編集長の新井智子あらいともこから声がかかった。私は大急ぎで自分のデスクへと向かう。

大きなバッグをデスクの上に置くと、引き出しを開けた。そしてご指定のものが入った封筒を取り出し、編集長に駆け寄る。

「んーっと……」

新井編集長は長めの前髪をスマートにかき上げながら、口を開く。

「フォントのサイズ、少し上げてみて。タイトルだけど、もうちょっと明るい色にしたほうがインパクトあるんじゃない？」

「確かに、そうですね」

「イエロー、強くしてみたら？」

「わかりました」

「あとはOKよ。このまま進めてくれる？」

心の中で私は、小さなガッツポーズを決めた。

大酒飲みだけドスタイルは抜群で、常に高級ブランドのスーツをカッコよく着こなしている新井編集長。四十代前半の彼女は、入社以来、私はずっと憧れている女性。

そんな彼女から、大きな修正もなくOKがもらえたのだ。嬉しくないはずはない。

以前彼女は、OL向けの超人気ファッション雑誌『ジュリー』の副編集長をやっていたらしい。斬新な企画を打ち立てて、当時低迷していた『ジュリー』を現在の知名度に引き上げたみたいだ。

そしてその手腕を買われ、八年前、『ウーマン・ビジネス』創刊時に編集長として引き抜かれたという。

新井編集長は政治経済分野の専門家ではなかったが、これまで見事に『ウーマン・ビジネス』の編集部を引っ張ってきた。読者が求めていたのは、単なるビジネスの知識だけでなく、快適に働くために必要な情報だった。そこに目を付けた新井編集長の誌面作りが、女性たちの心を捉えたのだろう。おかげで『ウーマン・ビジネス』は、創刊以来多くの読者から愛され続けている。

しかし最近、その部数も伸び悩んできた。同じようなコンセプトの雑誌が、世にあふれ始めたからだ。

そこで編集部ではどうにか巻き返しを図ろうと、編集長を中心に新しい企画に取り組んでいる。入社五年目の私も微力ながら頑張っていて、近頃ではひとりで特集ページを任せてもらえるようになった。

前号で担当した特集記事『すっきり疲れが取れる睡眠の秘訣』は好評だったらしく、嬉しいこと

に編集部には、続編を望む声が届いている。

毎日忙しいけれど、大きな遣り甲斐を感じていた。

今日は水曜日で、午後から週に一度の定例編集会議がある。時間になると、編集部の面々——女性八人が、そろそろと会議室に集まった。

みんな資料やノートパソコン、タブレットなどと一緒に、飲み物の入ったカップやペットボトルを持参している。

「新企画、決まったわよ」

全員が席につくと、新井編集長がそう発表した。

「もしかして、男性有名人の日常に密着取材する件ですか？」

そう聞いたのは副編集長の斉藤さんだ。彼女は新井編集長の右腕で、編集部を支え続けている。

「あっと驚くようなイケメンでいくから」

「もう、決まりなんですか？」

「はい、決まりましたよ。このところの『ウーマン・ビジネス』は、見事に伸び悩んでいるから。急いで新しいことをやらないと、休刊も見えてるし」

「誰に密着するんですか？」

「誰だと思っ？」

編集長はやけにもったいぶる。

「あの、でも。うちの読者に受けるような有名人って、難しくないですか？」

「いたとしても、そんな人はなかなか取材には応じてくれないだろうし……」

「もしかしてモデルさんとか、ですか？」

みんなが口々に発言する。

『意見と質問はその場ではつきりと』が、この編集部ポリシーだ。

そのうち斉藤さんが、みんなの意見をまとめ上げた。

「イケメンというだけで取り上げたら、軽いイメージになりませんかね、編集長。うちの読者には受け入れられないかもしれません。一度失敗して読者が離れたら、取り返しがつきませんよ」

斉藤さんの心配はもつともだ。単に顔が知られているだけの有名人を登場させても、意味はない気がする。

「私だってバカじゃないんだから、そのぐらいわかってるわ。いい？ 人選は確かよ。みんな、びっくりしないで」

それでも新井編集長は、自信たっぷりだ。彼女の次の言葉を待ち、その場が緊張に包まれる。

そして――

「ジャジャーン。今回、十日間の密着取材をさせてもらうのは……人気俳優の城ノ内翔さんです！」
編集長は堂々と発表した。

「えええーっ！」

会議室に、どよめきが起る。

「ほ、ほ、本当なんですか、編集長!? 間違いなく、あの俳優の、城ノ内翔なんですよね」

「今ドラマ、やってますよね！」

「私も観てますう。『御曹司様が来た!』でしょ?」

「結構視聴率、高いんじゃない?」

「ずっと前から、大、大、大ファンなんです！」

誰もが知る人気イケメン俳優の名に、みんなは今にも小躍りを始めそうだ。

確かに城ノ内翔なら、問題はないだろう。彼は知的で洗練された雰囲気を持つイケメンだし、『ウーマン・ビジネス』の読者層にぴったりだ。

「いいでしょ? 城ノ内翔なら」

編集長は誇らしげに言った。

「はい、もちろんです！」

「最高です、編集長！」

新井編集長の新企画は、編集部全員に絶賛される。

「それにしても、城ノ内翔サイドからよくOKが出ましたね。本当に大丈夫なんですか? 十日間の密着なんて」

斉藤さんが心配そうに言う。

「それはもう、あらゆるコネを使つて頼みに頼みまくつたのよ。なんといつても我が編集部が未来がかかった大仕事だから」

編集長はにっこり笑つて続ける。

「城ノ内翔の事務所の社長さん、男性ではあるんだけど、もともとうちの雑誌を読んでくださつていたみたいなの。読者に寄り添つた、良い誌面作りをしてるつておっしゃつてくれてね」

「そうなんですか!?!」

「事務所では、来年あたりに城ノ内翔の海外進出を狙つてるらしいから、イメージアップしたがつてるの。ほら最近、よくないゴシップも出てるでしょ?」

「あれ、ですよね」

斉藤さんが言うと、編集部みんなは小さく頷く。あれ? あれつてなんだろう。私は一人首を傾げる。

「だから、彼の経歴を前面に押し出させて、知的なイメージをよりアピールできる我が『ウーマン・ビジネス』の取材申し込みは、渡りに船だつたというわけ」

「なるほど」

新井編集長の説明がひと通り終わると、さつきまで一番慎重だつた斉藤さんが、一番乗り気になつていた。

「行けますよ、この企画!」

「でしょ?」

斉藤さんの強い言葉に、新井編集長はにこりと微笑む。

そして私も、なにかの縁を感じていた。今朝、偶然にも満員電車で目に留まつたのが、城ノ内翔のポスターだつたからだ。

「ところで、編集長。さつきですが、担当者のほうは……」

誰が城ノ内翔を担当するのか——斉藤さんのひと言に、全員の顔が引き締まる。

「そうね、今回、城ノ内翔に密着してもらうのは……」

みんなはいっせいに息を呑み、姿勢を正して編集長の次の言葉を待つ。

とはいえ、私はさして緊張していないけど。たとえ太陽が東へ沈んだとしても、私の名前が呼ばれることはない。編集者としての経験もまだまだだし、どちらかというと地味なタイプの私に、間違つてもイケメン俳優の密着取材が回つてくるはずはない……

——しかし。

「……木下さん、お願い」

「ええーっ!?!」

名前を呼ばれて一番驚いたのは私だ。どちらかというと要領も悪く、面白みもないこの性格では、芸能人のお相手などとても務まるはずがない。

軽めのトークは苦手だし、そのうえ恋愛経験はゼロで洗濯板のような胸——は関係ないにしても、別世界で暮らすトップスターの本音など、聞き出せるわけがない。

「編集長、ど、ど、どうして私なんですか？ ええーっ!?」
妙な声まで発してしまう。

「なに？ 自信ないの？」

新井編集長は責めるような目で、こつちを見た。

「そ、そういう、わけでは……ありま、せんが……」

私は困惑した。断る勇気もなければ、引き受ける自信もない。

そんな気持ちを察してくれたのか、斉藤さんが助けに入ってくれた。

「編集長、私も木下さんじゃ、なんというか……ちよつと厳しいんじゃないかと……」

「どうして？」

「いえ、その……」

自分で言うのもなんだけど、斉藤さんの言葉はもつともだ。なにより編集長が必死で取ってきた『ウーマン・ビジネス』の未来がかかった密着取材を、私がやっていいはずない。

「ただ編集長はこう続けた。」

「私は初めから、この話が決まったら木下さんに頼もうって考えてたの」

「え……」

「だって木下さんはいつも、仕事にきちんと向き合っているから。みんな、この人がくだらないミスしたところ、見たことある？ いい加減な仕事をしたことがあった？」

するとみんなも、納得したかのように頷き始める。

「手を抜かず、とにかく粘り強く、諦めずに一生懸命。それが木下さんでしょ？ 今回の密着取材には、そういう彼女の仕事ぶりが必要なのよ」

「編集長……」

私は今にも泣きそうだった。まだまだ半人前の自分を、どうしてここまで過大評価してくれるのか。

「や、やりますー！」

私は右手をすつと伸ばし、大声で言った。

「やります、やらせてください！ 頑張りますから、私！」

「そうよ。そうこなくっちゃ」

編集長はにこりと微笑んだ。

「ここにいるみんなも、そして私も、木下さんの力になるから。どこまでも城ノ内翔に張り付いて、テレビの画面では見られない彼の本音を探ってきてちょうだい。ただカッコいいだけではなく、人間くさい魅力のようなものをね」

「はいー！」

編集部のみならず、「頑張ってきてね」とか「羨ましい」とか「サイン、もらえるかなあ」とか口々に声をかけてもらう。

これまでの人生で、今日ほど幸せを感じたことはなかった。

ここはなんとしても編集長の期待に^{こた}応えて、『ウーマン・ビジネス』を盛り返すきっかけを作らなくては……

心の中で私は、しっかりと決意を固めた。

まずは、取材対象である城ノ内翔を知ることから始めよう。

私は編集部にある資料だけではなく、図書館にも足を運び、彼について書かれた週刊誌や新聞、インターネットの記事をすべて調べた。

城ノ内翔は、今年で三十歳。人気も実力も兼ね備えた日本のトップ俳優だ。これまでに主演したドラマは十一本で、映画が八本。

父親が外交官だったことから、十年以上の海外生活を経験している。スイス、ギリシャ、アメリカへと渡り、現在、両親と妹はドイツで暮らしているようだ。彼は優れた語学力を活かし、

海外進出への道を模索している。

芸能界デビューのきっかけは、ハーバード大学在籍中にモデルとして雑誌に登場したこと。

ハ、ハーバード……？

もともと芸能界には興味のなかった城ノ内翔だが、映画の主役として^{抜擢}され、演じるうちに役者として目覚め……

すごい。この人はただ者ではなかった。英語が^{流暢}に話せる俳優はたくさんいるだろうが、どうやらそれだけではないらしい。編集長が会議で、『彼の経歴を前面に押し出せる』と言っていた意味がわかった。

しかし調べていくうちに、否定的な記事やネットの書き込みも発見する。

城ノ内翔はグラビアモデル出身の女優、^{相田詩織}と極秘で交際中。城ノ内の事務所は彼女との関係を完全に否定しているが、^{相田サイド}は二人の交際を概ね認めており……

「概ね認める」とは、どういうことだろうか――

はつきりしないこの感じが、妙に引つかかる。つまり実際に二人は交際しているが、城ノ内翔の事務所が隠したがつているということ……？

相田詩織という女優の評判は、あまりよくなかった。巨乳を武器に女優デビューしたが、役者としての実力は今ひとつのようだ。彼女に離婚歴があることも、評判を下げる要因になっているのかもしれない。

真実はわからないが、とにかくこのゴシップが、最近の彼のイメージをダウンさせているらしい。

相田詩織のことを聞いたすと、決まって城ノ内の機嫌が悪くなる。プライベートを一切話したがない彼のことを、一部ではマスコミ嫌いとささやく声も……

プライベートを、一切話さない!? マ、マスコミ嫌い……!?

私はその記事に息を呑んだ。

城ノ内翔はもしか、気難しい性格なのだろうか――

私は彼のことでもっと知りたくて、これまで出演した映画やドラマのタイトルをすべて書き出し、レンタルDVD店に駆け込んだ。

あちこちの店を回り、城ノ内翔の出演作を全部レンタルしてきた私は、DVDを早送りしながら

ざっと目を通した。原作となっている小説がある場合は、図書館で借り、できる限り読む。

密着取材が始まるまで、あと一週間――

平均睡眠時間三時間という過酷な準備期間をなんとか乗り切り、緊張しながらも、どこかわくわくして、私は城ノ内翔との対面の日を待った。

詰め込んだ知識が、少しでも役に立てばいいけど――

今日は新井編集長とともに、城ノ内翔の事務所へ挨拶に行くことになっていた。いよいよトップクラスの芸能人と顔合わせして、一緒に仕事をすることになる。

落ち着くよ、亮子……

必死に自分に言いかけせるものの、どこか浮き足立っていた。

城ノ内翔が所属する芸能事務所、ダイヤプロモーションは、六本木のモダンな高層ビルの七階にあった。ここには彼を筆頭として、テレビや映画で活躍する売れっ子の俳優たちが、大勢所属している。

さすがに大手の芸能事務所が入っているビルだけあって、セキュリティのチェックは厳しい。新井編集長と私は、ICチップが埋め込まれた訪問者専用のカードを一階フロントで受け取り、

駅の改札口のようなゲートを通過した。

外の景色が見えるガラス張りのエレベーターに乗り、七階で降りると、美人の受付嬢が座るダイヤプロモーションの受付があった。

「いらつしやいませ」

「『ウーマン・ビジネス』の新井と申します」

「お待ちしております」

編集長が名乗ると、美人な受付嬢がにこやかに応対してくれる。私たちは七、八人が座れる小さな会議室に案内された。

香りのいい緑茶が運ばれてきて、待つこと数分――

会議室のドアがノックされ、事務所の社長とマネージャーらしき人に続き、城ノ内翔が入ってきた。

私たちは素早く椅子から立ち上がり、お辞儀をしてお迎える。

生で見る芸能人とは、これほどまでに神々しいものだろうか――

薄紫のストライプが入ったラフなデザインシャツに、ビンテージ風のジーンズ。引き締まった体格に、身長は一八〇センチほどで、とにかく脚が長かった。

顔はテレビで見えるよりも遥かに目鼻立ちがくつきりとしていて、彫りが深い。愁いのある魅惑的な口元に、すつきりとした顎のライン。さらりとした前髪がナチュラルに額へとかかっている。男

性なのにすべすべとした綺麗な肌をしていた。

城ノ内翔のイケメン過ぎる容姿は、まったく非の打ちどころがない。私は眩しい芸能人オーラを放つ彼に、即座に魅了されてしまった。

トップクラスの俳優というのは、これほど瞬時に人の心を捉え、離さないものなの……？

頭がぼーっとして頬まで熱くなり、心拍数がどんどん上がっていく。ハンサムなトップスターを目の前にし、私は夢見心地になった。

「初めまして、『ウーマン・ビジネス』の編集長、新井と申します」

そんな私に構うことなく、新井編集長はさっそく名刺交換を始めた。私も慌てて自分の名刺を差し出す。

「このたび担当させていただきます、木下と申します……」

まずは、少しお腹が出た、五十代前半に見える事務所社長の貝塚さん。次に、小柄で細身のマネージャー竹田さん。城ノ内さんは名刺がないみたいなので、こちらから渡すだけ。

けれどそのときの彼の態度は、お世辞にも感じがいいとは言えなかった。

なにが面倒なのかは知らないが、私が名刺を渡しても黙ったままで、小さく会釈するのみだ。どこか横柄にも見える。有名芸能人とはみんな、こんなものなの……？

そう思った瞬間、さつきまでの熱がすーっと冷めていくようだった。城ノ内翔のクールな態度で、私はようやく冷静さを取り戻す。

席についた編集長は、その後、どんどん打ち合わせを進めていった。

「取材許可をただけて、本当に嬉しかったです。ありがとうございました」

「いやいや、新井さんには以前、お世話になりましたからね」

貝塚社長の言葉から推測すると、二人は前からの知り合いのようだ。新井編集長がファッション雑誌『ジュリー』の副編集長をやっていた頃の話かもしれない。

いずれにしても、これほどビッグな芸能人を前にしてもまったく物怖じしない編集長が、私にはとてもカッコよく見えた。

ダイヤプロモーションの社長は編集長との挨拶を終えると、さっそく切り出した。

「ご存じかとは思いますが、城ノ内は来年、海外への進出を控えています。そこで経済雑誌の『ウーマン・ビジネス』さんにご掲載いただくことで、知的なイメージのアップを図りたいと考えております——」

「はい、ぜひご協力させてください」

「それによってCM契約等で企業様からのご協力が増えれば、これほどありがたいことはありません……」

しかしそのとき、いきなり城ノ内翔が発言した。

「果たしてそんな茶番が、俺の海外進出に、本当にプラスになるのでしょうか」

「え……」

クールな彼の意見に、さすがの編集長も息を呑む。

「おい、翔！」

社長が素早く彼を窘めた。

部外者の私から見ても、城ノ内翔と所属事務所との間には、営業戦略に関してなんらかの相違があるようだ。

「すべては城ノ内さんに、海外へ行ってもらうためなんですよ！」

マネージャーの竹田さんが、彼を説き伏せようとする。

「見せかけだけ整えても、中身がなければ意味はない」

「中身も十分、あるじゃないですか！ 城ノ内さんほどの実力で、いったいなにを心配してるんです？」

「心配しているわけじゃない。ただ実力は演技で示すものだろう。それ以外の面でなにかをアピールするつもりなんてない」

城ノ内翔の言っていることは、間違っていない気はするけど——それではうちの密着取材が、必要ないということになってしまう。

トップスターの突然の発言に、私たち編集よりも、社長とマネージャーのほう慌てているようだ。

「申し訳ありません、新井さん。城ノ内は仕事に熱心過ぎるところがありましたね。なんでも真面

目に捉とらえてしまうんです。決して取材に対して、どうこう思っているわけでは……」

「わかります。素晴らしいお考えですもの、城ノ内さん」

新井編集長は、にっこりと笑って言う。

「やはりトップクラスの俳優さんは、こだわりが違いますね。世の中の女性たちが、夢中になるはずですよ。だからこそぜひ、その価値観についても取材でお聞かせいただきたいです」

「ご理解いただいて、恐縮です……」

貝塚社長は頭を下げ、素早く話題を変える。

「密着取材は、十日間でしたよね？」

「あ、はい。少し長くなりますが、城ノ内さんの魅力を読者に伝えるため、ぜひともご協力をお願いできればと……」

「もちろんですよ」

「今回の密着取材は、我が編集部へのホープ、木下が担当させていただきましたので」

編集長は萎縮いしゆくしていた私の背中をぼんと叩いた。私は慌あわてて椅子から立ち上がり、深々と頭を下げる。

「よろしくお願いたします」

「十日間もご一緒させていただくわけですから、雑用でもなんでも、この木下にお申し付けください。きつとお役に立つと思います」

「一生懸命頑張ります」

編集長の大げさな言葉に、私はそう言うしかなかった――

城ノ内翔への密着取材特集は、二週間に一度発行される『ウーマン・ビジネス』で六回に渡って掲載される予定だ。

顔合わせは終了したものの――この仕事にあまり積極的だとは思えない城ノ内翔のことがいつまでも気になっていた。

電車の中吊りなかぶり広告では、あんなに優しく微笑んでいたのに……

城ノ内翔は、どこか理屈っぽいように見えた。

取材の際、筋が通らないことや納得できないことがあれば、とことん追及してくるのではないだろうか。

はあ……

マイナス方向に想像を広げてしまった私は、明日から始まる十日間に大きな溜息をついた。

だけど、ひとりぐだぐだ悩んでいても、解決できることなどない。まさか今さら尻尾しっぽを巻いて逃げるわけにもいかないし――

憧れの新井編集長が、他の誰でもなく、私を選んでくれたのだ。

もう、頑張るしか……。私は城ノ内翔に、全力でぶつかる覚悟を決めた。

編集長と一緒にダイプロモーションへ挨拶に行つた翌日から、人気俳優、城ノ内翔の密着取材は始まった。

不安はあるものの、『ウーマン・ビジネス』編集部の未来がかかった仕事だ。未熟な私を抜擢してくれた編集長の期待に応えるためにも、なんとか成果を残したい。

だけど思っていた以上に、取材は上手く行かなかつた。というのも、予想通り取材対象である城ノ内さんの協力がまったく得られなかつたからだ。

取材初日の今日は、情報番組への出演を終えた城ノ内さんたちと、世田谷にあるテレビ局の撮影スタジオで落ち合うことになってた。

人気俳優、城ノ内翔は、とても忙しい。連続ドラマを撮影している間にも、宣伝のためのテレビ出演や雑誌の取材、CM撮影や新たな作品の打ち合わせなど、スケジュールがぎつしりと詰まっている。そして、そのわずかな合間に台本を覚えなくてはならない。

そんな彼を待たせることなんてできない。私は時間に遅れないように、家を出た。スタジオの最

寄り駅まで電車で行き、そこからは徒歩で向かう。

だけど駅からスタジオまで地図を見ながら歩いているうちに、私は住宅街で道に迷ってしまった。厄介なことに雨まで降ってくる。

幸い折り畳み傘を持っていたので、雨宿りをせずにそのまま向かうことはできたが、激しくなっていく雨の中を二十分以上歩いたため、スタジオに辿り着いたときには、服やバッグ、履いていたパンプスまで、びしょ濡れになっていた。

「遅くなりました」

それでもなんとか約束していた時間には間に合つたので、ホッと息をつく。すでに収録を終えた城ノ内さんたちは、正面玄関に停めてあるワンボックスカーで私を待っていた。マネージャーの竹田さんが運転席から声をかけてくれる。

「どうぞ、乗ってください」

「ども……」

全身びしょ濡れなこともあり躊躇していると、竹田さんはわざわざ運転席から降りて、後部座席のドアを開けてくれた。

「すみません、私、雨に濡れてしまつて……」

このまま乗っては、車のシートを濡らしてしまう。そんな心配が頭をよぎつた私は、申し訳なくそう言った。

「全然構いませんから。さあ、どうぞ」

竹田さんは、なおもすすめてくれる。

「では、失礼します……」

私は革のシートが汚れないようにと、細心の注意を払った。しかし、後ろに座っていた城ノ内さんは、うっとうしそうに溜息をつく。

「すみません……本当にすみません」

私は何度も謝った。

「傘は持っていたのですが、雨が強くて……本当に申し訳ないです」

すると運転席の竹田さんが、

「よかったらこれ、使ってください」

と、助手席に置いてあったスポーツバッグの中からタオルを出し、手渡してくれる。

「すみません……ありがとうございます……」

はあ……

ひどい格好で車に乗り込んだうえに、タオルまでお借りしてしまった。おまけにもたもたしていたから、出発が少し遅れてしまったようだ。

城ノ内さんの機嫌を、損ねてなければいいけど……

そうして車は発進したが、城ノ内さんは私の存在を無視するように、黙って窓の外を眺めている。

やはり彼を怒らせてしまったのだろうか。密着取材の初日から、なんという失態……

どうしてバスの路線を調べておくなり、タクシーに乗るなりしなかったのだろうか。

それでも私は失いかけていた元気をなんとか奮い起こし、明るく城ノ内さんに話しかけた。

「今日は突然、降ってきましたね」

「……」

「ずいぶんお待たせしてしまい、申し訳ありませんでした。今日のスタジオでのお仕事は、いかがでしたか？」

「……」

しかし彼はなにも答えてくれない。ただ無視し続けるだけだ。まるで私が透明人間、いや、幽霊ゆうれいであるかのように。

そのうち、こちらからの問いかけがよほど邪魔だったのか、城ノ内さんは耳にイヤホンを差し込んだ。

「なにを聴いていらっしやるのですか？」

「……」

「好きな音楽のジャンルはなんですか？」

「……」

「ご自身でも楽器など、演奏されるのですか？」

「……」
なにを問いかけても、城ノ内さんが答えることはなかった。どうやら私は、完全に嫌われてしまったらしい。

彼がこの密着取材に積極的でないことは、知っていた。それでも懸命にぶつかれば、なんとか話が聞けるのではないかと思っていた。

でもそんな考えは、甘かったようだ――

私が城ノ内さんの態度に困り果てていると、運転中の竹田さんも気になったのか、

「城ノ内さん、なんとか言っておいてあげてくださいよ。このままじゃ、僕が社長から叱られるじゃないですか」

と、助け舟を出してくれた。しかし城ノ内さんはクールに言う。

「俺はこんな仕事、引き受けた覚えはない」

「そんなこと、今さら……」

「おまえから、社長にそう報告しておけ」

「城ノ内さん！」

「……」

もしかして私が、闇雲やみくもに質問を投げかけたせいで、余計に嫌になってしまったのだろうか――

「お疲れのところ、いろいろと余計なことをうかがってしまい、すみません……」

私が反省してそう言うと、今度は、城ノ内さんは腕組みをしたまま目を閉じた。

「寝る」

少しでも取材を進めたくて、焦ったのがよくなかったのかもしれない。

ふう……

私は小さく息を吐いた。このままでは城ノ内翔の魅力を伝えるどころか、ひと言のコメントももらえそうにない。

そんな私の様子を心配してくれたのか、マネージャーの竹田さんは、

「すみません、木下さん。僕でわかることなら、なんでも聞いてくださいね。いくらでもお話ししますから」

と、親切に言ってくれた。だけど、城ノ内さん本人から話を聞くことができなければ、密着取材の意味はない。

私はただただ、途方に暮れるしかなかった。

なんの成果も得られないまま、三日が過ぎた。このままでは『ウーマン・ビジネス』の命運をかけたビッグな企画は、失敗に終わってしまう。そうなれば、私だけの責任ではすまされない。抜擢ぼつてき

してくれた編集長にまで迷惑をかけてしまうだろう。

城ノ内さんは、私以外の人はふつうに会話をする。つまり、話してもらえないのは私だけ。初日の印象が悪かったのだろうか。それとも、密着取材自体に気が進まないのか。

悩みに悩んだ私は、新井編集長に電話で相談した。このままでは大変なことになると思ったからだ。

「編集長、本当にこのまま、取材を続けさせてもらってもいいのでしょうか」

私は切り出した。

『どうして?』

「今日も城ノ内さん、なにも話してくれなくて。このままでは結局、話を聞けないまま、取材期間が終わってしまいそうで……」

私は毎日、編集長に取材の進み具合を電話で報告していたので、抱えている問題の大半は説明しなくともわかってきているはずだ。

「私ではなくて、どなたかと交代したほうが。もうあと一週間しか、時間がありませんし」

『困ったわね……』

新井編集長も溜息まじりに呟いた。が、すぐさま、

『でも、木下さん。あなたって、そんなに簡単に諦める人だった?』

と優しい声で問いかけてくる。

『城ノ内翔の心を聞くために、見落としていることはなにかないの?』

「見落としていること、ですか?」

『どうしたら彼が話をしたくなるか、考えてみたことはある?』

『それは……』

すんなり密着取材の交代を言い渡されると思っていたのに、編集長は意外にもこんな言葉を続けた。

『まずは、相手の気持ちになってみることね』

『……はい』

『探せばきっと見つかるはずだわ。城ノ内翔が思わず話したくなるような話題が』

『そういえば……』

編集長と話をするうちに、思い出したことがあった。城ノ内さんは私に対してだけは、いつこうに口を開こうとはしないが、ファンには親切で優しい。

声をかけられたときには笑顔で手を振り、返事をすることも。時間があるときにはサインにも応じる。無断で写真を撮られても、文句ひとつ言わない。

『なにか、浮かんだ?』

「あ、はい。城ノ内さん、ファンの人にはとても優しく……」

『それよ、それ』

「えっ?」

『どうしてファンに優しいのか、考えてみて』

編集長は諭すように言った。

「自分のことを、応援してくれるから? 好きだと思ってくれるから?」

『そうよ、その通り。人って自分を好きだと思ってくれる相手には、決して厳しくできないものよ』

『そうですね……』

『だから木下さんも、彼のファンになってみてはどう?』

「ファン、ですか?」

『気持ちを抱むには、その方法が一番のはず。あなた、城ノ内翔の作品を全部借りて観たんでしょ?』

「はい」

『なにか感じたことは、なかったの?』

「……」

確かに私は彼の作品をすべて観た。どの作品も演技に対する彼のこだわりが細部にまで感じられ、自然と画面の中に引き込まれるものだった。

役作りのために体重を二週間で十キロも落として臨んだという映画もあり、城ノ内翔の作品への

強い思いが伝わってくる。

城ノ内さんのファンたちは、そんな彼の真摯な演技に魅了されているのだ。外見だけではなく、役者としての彼の内面の虜になっっているに違いない。

「ありがとうございます、編集長。その線でもう一度、食らいついてみます!」

『頼んだわよ、木下さん』

「はい」

そう返事して電話を切った。自信を失くしていた私に、編集長は素晴らしいヒントをくれた。

よし!

全身にはふたたび、力が漲っていた。

一流のファッション雑誌の撮影風景は、やっぱり違うな……

城ノ内翔の密着取材四日目となった今日は、人気ファッション雑誌のスチール撮りから始まっていた。

うちの編集部ではこれまで使ったことのないような大きなスタジオに、有名カメラマン。そんな完璧な舞台で、城ノ内さんは次々と表情や動きを変えていく。

ダンガリーシャツにベージュのチノパンというカジュアルな装いだったが、トップスター城ノ内翔が身に付けるのものごくカッコいい。

しかし私はといえば、昨夜の編集長との電話で決意を新たにしたというのに、まだなんの成果も得られていなかった。

彼の心を開くための作戦をあれこれ考えてはきたが、いざ城ノ内さんを目の前にすると、妙に気持ちが萎縮いじやくしてしまう。

情けないことに今も、マネージャーの竹田さんと一緒に、ただスタジオの隅から彼の撮影を見守っているだけだ。

「竹田さんは城ノ内さんのマネージャーになられてから、もう長いんですか？」

「まだ一年ぐらいです。以前は女優の永澤ながさわ真美まみを担当していたんですが、彼女、結婚後はしばらく休養することになった」

そう言う竹田さんも、薬指にリングがあるところを見ると、すでに結婚しているようだ。小柄で物静かで、どこまでもタレントさんを大事にしている彼。

「大変なお仕事ですよね」

「僕ですか？」

「ええ」

ふと、そんな言葉が口をついて出た。家庭があるのに、時間が不規則な仕事は大変だろうな、と

思ったからだ。しかし、城ノ内さんと私のやりとりのすべてを知っている竹田さんは、別の勘繰りをましてしまったらしい。

「いい人ですよ、城ノ内さんは」

「え……」

「ちよつと、マスコミ嫌いなところはありますが」

「マスコミ嫌い、ですか？」

「意外と融通が利かないといえますか。これまで、あることないこと書かれてきたからということもあるんでしょうね」

「はあ」

「だから、木下さんのことも警戒してるんだと思います」

「……」

これまで城ノ内さんが取材に応じてくれないのは、彼の性格が気難しく、対応の下手な私のことを嫌っているからだと考えていた。でももし竹田さんが言うように、城ノ内さんが私をマスコミの人間として警戒しているためなら、先は見えてくる。

昨夜、編集長から教えられたように、彼の味方、ファンだという気持ちで接すれば、なにか変化が訪れるかもしれない。

に、しても……

どうして城ノ内さんは、そんなにマスコミが嫌いなのだろう。竹田さんは、あることないこと書かれてきたからと言うけれど。

「あの、竹田さん……」

そのあたりを詳しく尋ねようとしたとき——竹田さんの携帯が鳴った。

「あ、はい、竹田です……そうですが……」

竹田さんは、私をスタジオの隅に残したまま、スタスタと外に出ていく。

そ、そ、そして——

最悪のタイミングで、撮影が休憩に入ってしまった。城ノ内さんがゆっくりと、こちらにやってくるのではないか。

ど、どうしよう。怖い……

私の全身を緊張が駆け抜けた。『まずは彼のファンになる！』という意気込みさえも、砕け散ってしまいそうだ。

どこから見ても眩しいオーラを放つトップスターは、スタジオの隅に置いてある彼専用の肘掛け椅子に腰かけ、長い脚をゆったりと組む。そして側に置いてあったペットボトルを手に取り、お茶を口に含んだ。

「お疲れ様でした。竹田さんは、あの……電話がかかってきたので……」

「……」

「私でよければ、なにかその、お手伝いを……」

「……」

頑張つて話しかけてみたものの、いつも通りの反応で、彼が答えることはなかった。彼は少し前かがみになり、スタジオのあちこちに目をやりながら、スタッフたちの動きをクールに眺めている。

やっぱり……

実は城ノ内さんのファンなんです！ と、いきなり打ち明けてみようか——

いや、それではあまりにも唐突だ。かえって心証を悪くする恐れがある。

だったら……？

私はなんとか取材を進めたくてあれこれ考えてみたが、なにひとつ実行できなかった。ただ自分ひとりで空回りしてるだけだ。

その場を取りつくりつたようなこんな態度では、頭のいい城ノ内さんに見透かされてしまう。

だからといって、このままでは……

私はできる限りの勇気をふりしぼろうとしたが、圧倒的な存在感を持つ彼を前にして、ただオロオロすることしかできなかった。

——すると、そのとき。

どこか女性っぽい雰囲気男性が、城ノ内さんに話しかけた。

「あーら、翔ちゃん。新しいマネージャーさん？」

「いや、雑誌の取材」

城ノ内さんは、ややつつけんどんに返答した。するとその人は、私に向かつて聞いてくる。

「どちらの方？」

私は慌あわてて名刺を差し出した。

「ウィークリー経済社、『ウーマン・ビジネス』編集部の木下と申します。どうぞよろしくお願いいたします」

「木下、亮子さん？」

「はい」

その人は私の名刺を受け取ると、まるで値踏みでもするかのようになり、上から下まで私に目を走らせる。

「ビジネス雑誌の取材だなんて、珍しいわねえ」

「はい。このたび、城ノ内さんに十日間密着させていただくことになりました」

「みみ、密着？ 翔ちゃんに!？」

「はい」

「女が!？」

「え……」

もしかしたらこの人は、城ノ内さんが好きなのかもしれない。女の私が密着することを、快こころよく

思っていないようだ。

だけどその男性は、すぐに気を取り直したように言った。

「そんなに気にすることもなさそうね。ボディラインのほうは、かなり控えめな感じだし」

失礼な発言だとは思ったけれど、下手に目をつけられなくてよかったと胸を撫なで下ろす。その人は、今度は親しげに話しかけてきた。

「ところであなた、インタビュアーとして、なにか勉強はしてきたの？」

「べ、勉強ですか？」

「そうよ」

「い、いえ……とくには」

「とくには!？」

「……あ、はい」

「ちよっと、木下亮子さん。翔ちゃんはこの世界では、トップクラスの人なのよ。そんないい加減な取材姿勢じゃダメよ!」

「すみま、せん……」

「手にはペンも持ってないし。本当にあなた、大丈夫なの？」

「そ、それは……」

私の脳裏には、城ノ内さんの取材がまったくできてないという事実が浮かんだ。無能な自分が責

められている気がする。

「申し訳ありません。これから気を付けます……」

私はなぜか、初めて会ったこの人に謝っていた。

するとどういいうわけか、ちらりと私のほうに目をやった城ノ内さんが、いきなり会話に口を挟んでくる。

「あまりいじめないでくれよ、カズさん」

「別に、いじめてるわけじゃ」

「彼女、これでも頑張ってるんだ」

「やだ、翔ちゃん。私の前で、他の女の肩を持つなんて……」

この人の名前は、カズさんと言うらしい……

そ、そんなことより——聞き間違いでなければ、城ノ内さんが私のことを庇^{かば}ってくれている。しかも頑張っているとまで!?

これまで、どんなときにも私を無視し続けてきた城ノ内さんが、初めて存在を認めてくれている。こんなに嬉しいことはなかった。

私の心は喜びでざわめき立つ。

城ノ内さんから叱られたカズさんは、ぶうつと頬を膨らませておどけたように言った。

「やあだ、もう。翔ちゃんのい、じ、わるう」

それからカズさんは、身に付けていたエプロンの大きなポケットからパウダーパフを取り出した。そして城ノ内さんの顔に押し当てるようにメイクを直していく。

どうやらこの人は、メイクさんのようだ。

カズさんは職業柄なのか、とても会話上手。城ノ内さんを退屈させることなくメイクを直し、笑いを交えて軽快にトークを進めていった。

「そういえば翔ちゃん、今日の衣装って……ほら、あのときの映画の、例のシーンに出てきたのに似てない?」

「ん?」

「だから、ほら、あれよ……やだ、私ったら、もうボケがきちゃったのかしら。北海道でロケした……」

カズさんは身振り手振りを交えながら城ノ内さんに説明するが、その映画のタイトルを思い出しそうな気配はない。

私はこの二人の会話に割り込んでいいものかどうかわざいぶん悩んだが、カズさんがあまりにもじれたそうにしていたので、ついつい口を挟んでしまった。

「もしかして……『我がままな自由たち』、ですか?」

「そう、それよ。『我がままな自由たち』。あのときの学生食堂のシーンで着た衣装に、似てると思わない?」

カズさんが言うのと、城ノ内さんは、

「まあ、確かに」

と、自分の衣装に目をやる。

「翔ちゃんはホント、なんでも着こなせちゃうわね。ビジネススーツからカジュアルまで。合わないものがないくらい。アパレルからのCMのオファーだって、山のように来てるんじゃないの？」

「まさか」

カズさんは城ノ内さんをどこまでも持ち上げ続けた。それにはさすがの彼も嬉しいのか、照れたような笑みをこぼす。

そんな城ノ内さんをここにこ見ていたカズさんは、いきなり私のほうへと視線を移した。

「にしても、あなた……よく知ってたわよね、そんなマニアックな翔ちゃんの映画」

「城ノ内さんの作品は、だいたい観させていただきましたから」

「もしかしてファンなの？ 翔ちゃんの？」

「……あ、はい」

私は言いたかったことをズバリ聞かれ、思わずそう返事をする。

「じゃあ、このお仕事、美味しくて堪らないでしょ？」

「美味し、い……？」

「つまり、嬉しいってこと」

「はい、もちろんです」

するとカズさんは、なぜか私に対抗するようにクイズを出し始めた。

「んー、だったら……翔ちゃんのデビュー作の映画のタイトルは？」

「『ストロベリーラバーズ』です」

「監督は？」

「まつもとゆうじ松本祐二、監督？」

「ラストはどうなるのかしら？」

「城ノ内さんが恋人の死を乗り越えて、また日常生活に戻っていくのですが……」

「なかなかやるじゃない」

カズさんは褒めてくれる。

「あつ、でも」

私は気になっていたことを付け加えた。

「本当は日常に戻ったわけじゃなくて、時間が止まっていたんだと思います」

「どういうこと？」

「愛用していたスニーカーを履かなかったり、いつも立ち寄っていたコーヒESHOPPを素通りしたり。そんなシーンを見ていたら、主人公の中で時が動いていないように見えて……」

「そう、だった？」

「はい、エンディングで……」

私の言葉に、カズさんは首を傾げる。そのとき、城ノ内さんが口を開いた。

「その通りだ」

私は驚いて、彼の顔を見つめる。

「『ストロベリーラバーズ』には、今彼女が言ったような、別の解釈が含まれている」

「あら、そうなの？」

「ああ」

カズさんは少し悔しそうにしながらも、私に言った。

「なかなかやるじゃない、木下亮子さん。合格よ。ね、翔ちゃん」

緊張で身体が強張った。城ノ内さんが、そうだと口を揃えてくれるはずがないから。

しかし——彼は初めて私に視線を移し、

「いい着眼点してるよ、出版社の人」

と、褒めてくれた。

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

夢を見ているような気がした。あの城ノ内さんが、私を褒めてくれたばかりか、素敵な笑みまで向けてくれるなんて。

「あ、あの……」

私は瞬時に、その笑顔に惹き込まれてしまった。心臓がどきどきと大きな音で鳴っている。

彼がどこまでもカッコよく見えた——

「はい、これでいいわ」

カズさんは、城ノ内さんのメイク直しを終えたらしい。

「城ノ内さん、お願いします」

そのタイミングで、カメラマンの助手さんから、後半の撮影開始の声がかかった。

立ち上がった城ノ内さんは、飲み終わったペットボトルを私に差し出す。

「え……」

「雑用もやるとか、言ってたよな。これ、捨てといて」

「は、はい。もちろんです」

彼はただ近くにいた私に、ペットボトルを渡したただけなのに——それでも飛び上がりたくなるほど嬉しかった。

「ありがとうございます、城ノ内さん！ 後半の撮影も頑張ってください！」

あまりにも大袈裟に声をかけたせい、城ノ内さんはハンサムな顔で苦笑する。

彼はスタイリストさんから差し出されたジャケットを受け取り、後半の撮影が始まった。

しばらくすると、電話を終えた竹田さんが戻ってきた。

「竹田さん、竹田さん、聞いてください」

私は思わず彼の名前を連呼した。

「今、城ノ内さんが、私に話しかけてくださったんです」

「ホントですか？」

「ペットボトルまで、渡してくれて」

たった今、城ノ内さんから受け取ったばかりのペットボトルを誇らしげに見せる。

「やりましたね、木下さん！」

「はい！」

私は、幽霊ゆうれいから人間にやっと昇格できた気分だった――

――密着取材五日目。

本日の城ノ内さんには、雑誌の取材が三本と、以前に撮影したウイスキーのCMの音声録りが入っていた。スタジオから取材現場のホテルのスイートルーム、そしてまた別のスタジオへと、分刻みで移動する。

それでも若いアイドルに比べると休日もあるし、さほど仕事は詰め込まれていないという。新人

の売れっ子芸能人は、いったいどれほど忙しい日常を送っているのか。私はただただ感心するばかりだ。

また、どこへ行っても、追っかけと呼ばれる城ノ内さんのファンに遭遇であうした。九割が女性だが、驚くことには中には男性の姿もあった。

どこでどんなふうに、彼のスケジュールを調べているんだろう――

「きゃーっ、翔さんー！」

「素敵ーっ！」

今日もファンたちは、城ノ内さんが乗っているワンボックスカーを見つけ出して、黄色い歓声を上げた。彼が車から降りると、ものすごいスピードで取り囲む。

けれど、城ノ内さんは嫌な顔ひとつせず、時間の許す限り、差し出された色紙にサインをし、笑顔でプレゼントを受け取り握手をする。無断で写真を撮られても、決して文句を言わない。彼はとてもファンを大切にしていた。

おそらくこんなところにも、トップスター城ノ内翔の人気の秘密が隠されているのだろう。

そして、ファンたちに優しく接する城ノ内さんを見ていたら、なぜか私まで温かな気持ちになった。

昨日、撮影スタジオで初めて声をかけてくれたから、城ノ内さんは少しずつ私と話をしてくれる

ようになった。

本日最後のスケジュール、CMの音声収録スタジオでも、マネージャーの竹田さんが電話で席を外したすきに、

「俺の作品で、なにか一番おもしろかった？」

などとききなり聞いてくる。

「全部おもしろかったですよ。どれも惹き込まれてしまって……一番ですか？ とても決められません。いくつも頭に浮かんでしまっただけ」

「なんだよ、それ」

城ノ内さんは苦笑した。

「だったら聞き方を変えよう。一番好きな作品は？」

「そうですね……」

こんなふうに会話が成立していて、とても嬉しい。ただ取材する立場の私が、逆に質問されているという、ちょっと変な構図だけだ。

「やっぱり……『レンアイ教室』でしょうか」

『『レンアイ教室』、ね」

城ノ内さんは少し驚いたように目を見張った。

「あ、す、すみません。私……」

昭和初期の時代設定で作られた『レンアイ教室』。お金のために好きでもない相手と結婚しなくてはならないヒロインタタのため、城ノ内さん扮する満男が、親から受け継いだ財産のすべてをなげうって彼女を支えようとする話だ。

私は記憶を辿って、原作も好きなこのマニアックな映画のタイトルをあげたのだが、考えてみたら、この映画の主演は彼ではなかった。

ただ城ノ内さんの狂気に満ちた役のイメージが鮮烈で、もっとも印象に残っているのだけ——主演でもない作品をあげるのは失礼だったかもしれない。

「ごめんなさい、だから、私……」

やっと話してもらえたようになったのに、なんとという失敗だろうか。私は自分が情けなかった。どうしてだ？ どうして、そう思うんだ？

すぐに謝ったが、城ノ内さんは私を問い詰めた。

「だ、だから……申し訳ありません！」

「俺は謝れとは言っていない。どうして『レンアイ教室』が一番好きなのかと聞いているんだ」彼の口調はとてつ鋭い。やはり彼を怒らせてしまったのだろうか。ようやくここまで漕ぎ着けたのに。今までの長い道のりを思い、全身から冷や汗が噴き出した。

「そ、それは……」

「ん？」